

五月十六日(土) PTA・育成会合同総会が開催されました。目白校舎が手狭なため、ご来校いただいたのはPTA・育成会の役員の皆様のみ。合同総会の様子は、後日オンラインで配信することになっています。

私の与えられた話の時間は二十五分。総会の前半が順調に進んだため、もう少々話ができる余裕ができました。この日は、認知科学・言語心理学・発達心理学のエキスパート、慶應義塾大学名誉教授、今井むつみ先生の著作をもとにお話しをさせていただきました。

◎近年はAIが目覚ましい発展を遂げているが、AIの行っているのは過去の事例のパターン化であり、新しい知識を生み出しているわけではない。

◎科学の進歩や人の学びを前に進めてきたのは、常に不完全でも新たなアイデアや仮説を生み出してきた人間の方。子どもたちがそれまでに持っている知識を使いながら、新しい情報を統合し、自分の理解を修正し、拡張していく力こそが重要。

◎子どもたちが持っている知識を使い、新しい情報を統合し、修正し、最も正しいと思える原因を推測する思考法―「アブダクション推論」―が重要。

◎もう一つ重要なのが「記号接地」という考え方。言語や数といった「記号」を現実世界の感覚や経験と結びつける(接地する)こと。例えば「リンゴ」という言葉について、

触り、匂いをかぎ、食べてみるという試行錯誤をして覚えた場合と、画像だけで覚えた場合とは、頭にできる概念の質は全く違ったものになる。五感を使って得た知識は、応用できる生きた知識になるが、画像だけの知識は薄っぺらなものとなる。と、こんな話しをさせていただき、「言葉の力」をつけるためにも、「記号接地」のためにも、「お手伝い」が有効であるというお話しもしました。



例えば食事の準備で、子どもたちに「イカの皮むき」を手伝ってもらおう。「イカの足は何本?」「猫がイカの足を二本食べたら残りは何本?」「イカはフランス語で『アシガジ ユポーン』と言うの。でも日本語の正しい発音は『ジッポン』ですよ。」(※前半は当然冗談だとお伝えください。)

「今晚はイカ飯の予定だけど、田代校長のような顔つきを『厳(イカ) めしい』というのよ。」等々、「言葉の力」や「記号接地」のために、お手伝いは必須である。実際、イカの皮むきのお手伝いをした子どもたちは、イカのヌルヌルした質感や匂いまでも感じ取ってくれるに違いありませんとも、お話ししました。

この辺りでやめておけばよかったのですが、時間に余裕があったので、「白亜紀のタコは、十九メートルもあったそうで、海の覇者であ

ったようです。」「イカの墨は料理に使えるおいしいものですが、タコの墨はお料理に向き。」「イカは逃げるときに墨を吐いて煙幕のようにして逃げる。タコは墨の塊を吐いて分身の術で逃げる。」「昔中国で、イカの墨で証文を書くとき、しばらくすると字が消えてしまうので、人をだますときに使っていたそうなのです。」と、まくしたてました。

総会終了後、一人のお父様がわたしの所に来られ、「余計なことかもしれませんが。お気を悪くならず聞いてください。先ほどのイカ墨とタコの墨の話は逆だと思われれます。イカが墨の塊を吐き、タコが煙幕で逃げるのです。イカの墨は料理にしておいしいものです。ですから、イカのおいしい味のする塊に敵がかじりついていっているうちに逃げるのです。」と、教えていただきました。

恥ずかしながら、うる覚えなイカげんな知識で、完全に反対のことを話してしまい、申し訳ございませんでした。理由まで丁寧にお教えいただいたので、今後二度と間違いません。本当に有難うございます。

月曜日。なんと、実際にイカの墨で「校長」と書いてくれた四年生がいると、担任より報告を受けました。

保護者も教師も子どもたちも、「学び合う学び舎(まなびや)」。なんてイカす(※もう死語に近いかもしれませんが…)のでしょう!  
(立教小学校校長 田代 正行)